寛永諸家譜

清和源氏十四世之内

満政流

52

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(52)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

水野　乾

寛永諸家系圖傳

清和源氏　壬一

満政流

水野

家傳ないく先祖名田酒仲光

結城守房北将軍源満政ゟ出る

満政のゝ子を陸奥忠重といふ忠重

ゝを渡河守定家ゟ出る定家

仕渡守重家といふ重家ゟ仕渡

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

源左重實ニ仕ふ二子ある信濃守重定ハ
小川三郎重房其子小川又三郎重清是
も小川ニ称号すれハ尾刑水野に
移くしたがつて水野ハ称号ともちゆ

●系

又三郎
天福年中猶金ハ有

雅綱
下野守
尾刑英比郷の内小河村ハ北頭ヲ
文永元年八月廿五日死ス　法名雅實

雅継
下野次郎
文永元年八月十五日の譲状をもつて

翌年十二月七日父が同業をつぐ小山村の地頭職を補ぜ将軍家政所より書これあり

弘安元年十一月卒す　法名覚妙

乱雅

下野守

弘安元年十一月廿六日より譲状をもつて同七年十月朔日父が同業をつぐ地頭職を補ぜる軍家政所より書これあり

会津の郡ふ八のごとく

東

下野九郎入道

元亨二年十月廿日常陸国藤貞

古川流奥号雅貞が説文これあり其文

言約失せ

小河下野又次郎
源忠義に屬して別に別のあらぐ
小紙く軍功をもとげまつ又忠義
つく関東よりく
紀元二年十一月廿二日忠義書をた
まふ
同三年閏二月廿日合戦の時忠氏の旗
下に屬して別に別のあらぐ
同年三月十一日忠氏書をたまふ
以同敕代中將

奥守

毛野義人
宇宙乾坤號を建立す
文明十九年六月十八日死去五十一歳
玉室全通と号す茶毘此日二日あり

舍利數粒を授ける

某

永正十一年十月三日死す
寶幡寶勝と号す

某

下野守
一初金妙と号す

忠政

嘉吉元年　父の遺命を受ぐ
天文十二年七月十二日卒す　大溪宗雄
と号す

某

彦七郎
元龜二年十二月廿二日出家して死す
安光正念と号す

信元

下野守　三河苅屋城を

天正三年十二月廿七日信長のためにうしなはる　法名大英道光

女子

河内宮

女子

女子

紀伊の松平紀伊守に嫁して鳥居左京亮が

外祖母なり

信近

彦九郎

永禄三年四月十九日今川義元伊賀流

をたのみて苅屋城を攻しとき信元死し

て信近為せうに敵を攻入るなり

信近討死　信元嫡孫馳集りて伊賀

女子

元を悉く討殺して城全き事を得
り

贈大納言廣忠卿小嬢を御方申
号す
天文十一年
東照大権現御誕生あり
弘長七年八月廿九日薨去七十五歳
傳通院殿光誉蓮心知香大禅定尼

忠守

号す
織部
尾州智多郡小河城を申て御く先
下野守信元と忠守三州の内
をく小く高く義切切て、其後元
て小河乃城を立去く
大権現てつゝ出てまりる

天正十八年

大檜原関東御入國れ忠守 御とうけ
まもるゝ相州玉縄城を本城とまもる
兵士ゟ二三の丸をまもるゝ又玉縄の
ゟ兵代代炎小行せて厨料を忠守
たまいりたゞゝ御意ゟ小あづかる
大檜原の御ゟ後ゝ子忠元ゞ北相州江
同郷ゟ玉ゝ同原ー数年を経ゝ年
す年七十六 法名芳心

守重
多文 孫助 法名宗三

守元
多文 法名一法
春守
同情右 法名宗重
女子

守正

小熊

元和四年

右法院殿を扶しまつりたる

将軍家つゝく御書院番をた

ゝむ

守次

孫兵衛

元和四年

右法院殿を扶しまつりたる

将軍家つゝく御小納戸の役を

つゝむ

忠元

豊後

初め北河内

大膳亮の作を後つく

右法院殿つゝく度く御意志を

奉り知りの御加護をたまふ

慶長十年

台徳院殿將軍宣下の時忠元從の法下に
叙せらる

大坂陣前

台徳院殿の御使に徳川牲組の書狀と
なる沙左衛門尉の兵士
を指揮して使者を
二条下野國の内山川結城康泥板橋
をもびよ江別れ同く三方立ふと

たまたまく政勢をあづらきく

元和六年十月六日江戸にく卒を
歳四十五　法名体前宗羅

右馬允

重家

勘八郎

重勝

右衛門

五郎三郎

元吉

後嵯峨

白河院殿

将軍家一位の人なり

元正

小十郎

寛永十二年八月

将軍家と拝し奉る

忠吉

監物

九歳の時

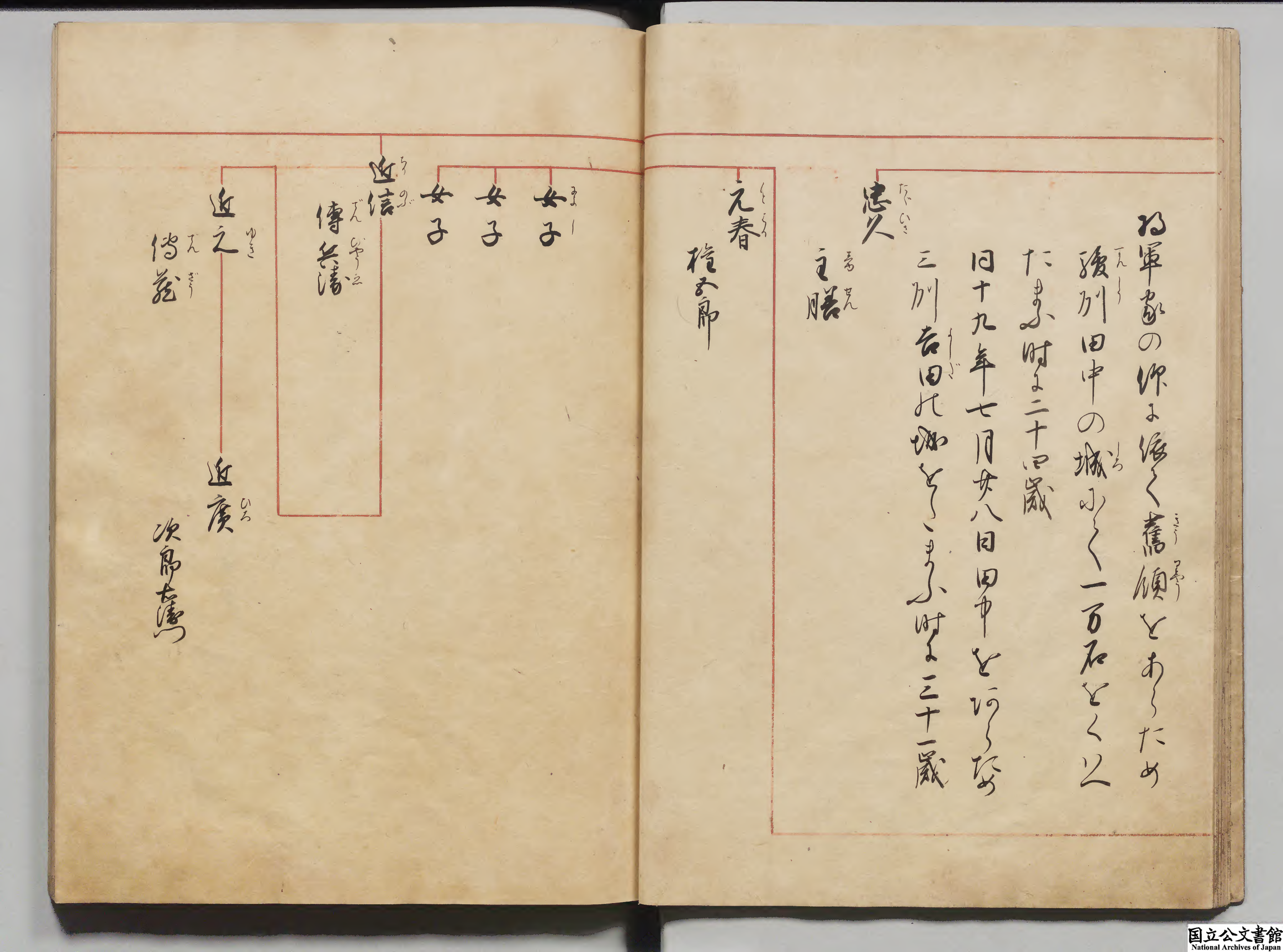
白河院殿の御ゆく父が家督とつぐ

それ遺跡をたまふ

寛永七年従五位下に叙せ時よ十

九歳

同十二年八月四日



初軍書の作よ後く舊領をあらため
後別田中の城ゆ〻一万石をくゝ
たまふ時よ二十四歳
同十九年七月廿八日四市を切腹な
三別吉田北郡をくゝまふ時よ三十一歳

忠久
　　元春
　　左衛門尉

女子
女子
女子
近信
　　傳兵衛
近之
　　傳蔵
近廣
　　次郎左衛門

孫

孫平重

今川氏真が幸あり自害せり

女子

長鍋　中山氏が妻

中山氏を忠政が妻人なり

女子

尾刑大弓丸水野大膳に嫁せり

孫

飯次郎

織田信長に属せり

天正六年十二月八日信長より高くひらく

摂刑を器ふく討死時小田十二歳

心得全く少年なり

分長

三郎　源左衛門　後に源兵衛と称す

天正十二年長久手御陣の時為野

毛利藩志を以て屬して軍功とする
の首級を獲
同十八年山内氏の時毛利藩より
しきりに義兵を出すべきことを
ゆ歟と云のこと
大槍現ゆ渡し給命に依て藩生
花房氏歸ることに先陣と成
く奥刑九郎より義兵あり
文長四年

大槍現より大御番頭となる
同八年関原陣に供奉
同六年尾刑小河より知一万
石を賜ふ
同九年六月廿二日従五位下に叙せ
大坂為代御陣に供奉
元和二年
大槍現豊御の時分長崎にて
むしゝ

台徳院殿ゟ之御書

同年八月江別紙二通の地を

くゝ入たまふ

同四年伏見の御屋敷とつゝくゝ賜年

江戸ゟ御書

同六年四月大井大炊頭利勝

台徳院殿御命をうけたまはりて合長を

水戸中納言頼房卿の伏見に遣す

同九年三月朔日六十二歳にて卒

法名英真

元和

御墓

寛永十二年十月

台徳院殿ゟ之御書

同十七年九月廿九日従江戸使たし解を

大坂西殿北御陣所醤油壺元小

屋にて伏見とつゝくゝ

元和二年
白浜院殿の命に依て来地千石を
給ぜ
白浜院殿
為軍功御入洛のうへ日光御社参
の時へびく供をつかむ
同六年父合長頼房卿小屋にて
知行一万石を給ぜられ元
和三月新地にて別て一万石を
地をたまふ是合長が知行に依て
なり
寛永元年
白浜院殿の御下に依て
将軍家よりたくまし川西
養者為を元服せしむ　仰命に依て
同九年十一月十日
同十年江戸三月九日四日の名
の地をたまはりて大御番の

改めなり
寛永三年大坂陣番を勤む
うけ大坂なりびよ二條
出番すべき事と定る六度

元和
大和守
将軍家と拝しなり

女子
松平伊豆守家忠ゞ妻

義忠
清六郎
幼少の時
大猷院様ゟ仰く大御番被
天正十八年 仰ゟ仰く大御番被
ゟ仰なり
同十九年二子の来歴を尋ぬ

のち
右徳院殿ハ つゝ
寛長七年十月十一日死ス年三十
六 江山玄壽ト号ス

重央

義次郎 対馬守 出雲守
初めハ対馬つゝ
大橋現ハ江戸ニ住ス
天正四年 始ハ信濃大洗崎ニ移

となる
慶長六年従ハ信下に叙し対馬
守ハ従ハ
日十三年
大橋現の命ハ信濃宣卿ハ信
濃ハ老となり常州水戸の内ニて
一万石ハ地と頒ぜ乃ち新宣卿
頒別重別と頒ぜ時重央
大橋現ハ命に信濃遠州浜松乃

城主ごとく二万石此地を領
元和元年頼宣卿駿府領
あらためて紀州領に編入
新宮城ともに
と領す

同七年丹二郎
月山浄春

長勝
大義の輔

勝政
松平豊前守　系図別に見あり

女子
大関弥平次が妻

重良
数次郎　法名
寛長十二年
大橋氏と称し

作り給く
白河院殿りつくてまゐる
元和元年従五位下に叙し法橋
宣に任ぜ
同九年四月
白河院殿の命に依く
将軍家より法眼
同年六月
将軍家の仰せ
京都より

くこの時
西御所の命に依く勢宣卿小法眼
家光となり父重央が遺跡をたま
りつく新文の堀ゆく三百石あり
と仰せ

女子

槙宣卿の家臣水野平左衛尉義重が
妻

女子

頼宣卿の家臣小笠原長藤の射

義門が妻

女子

松平右京亮守康侍従が妻

女子

有馬出雲守長頼が妻

宗清

数次郎

下総守

寛永元年

台徳院殿

将軍家を拝したてまつるはら

台徳院殿御命令ありく

将軍家にたてまつる

同六年御書院番に入

同七年従五位下に叙し下総守に

叙す

同十八年　御小姓組

の孫なる者

良安
左門
女子
良令
主殿
女子
女子

忠保
清六郎　甲斐守
白河院殿よりつとめる者
元和四年　治承くれ書院番の組
頭となる者
四年後の法下に叙し　甲斐守
任ぜ
寛永十年

将軍家七百石の地を以たまひて召
合三人成候ぬ

女子
岩川市正妻

光綱
清右衛門
六歳に成ぬ

将軍家より清久たまはる
元和六年
但し後に少将組の番

頭となる七百石をたまふ
同九年従五位下に叙し摂津に
但し
同年五百石をもを以たまふ
寛永元年
但し後に御書院番の
組頭となる
同年召れ地を以たまふ召合二
五石
同七年三十歳にて死
清右

大鉄道阿

京極

高氏

寛永七年父が生涯をたふ

同八年六月

将軍家ようつくなり

忠重

筑十郎　　越前守

永禄元年兄信元小ちくとく川

義元が無尾刑智為敵小川石瀬

小〳〵合戦の時一番に進とあらせて

兄筑次郎小二十首取小らむ織田

信長ようてうれ兄に礼ある事

と感ず

英雄晴重系図かくのごとし

俗人正忠清系図ようなり永禄元年

と弘治二年ようなり

同四年長濱より織田信長
大樹現の御旗下に屬を乞ひ
忠を尽し元亀二年信長に屬
し荊尾城を攻落し信元
佐久間右衛門尉に譲り信長
たのみ害せしめ信長荊尾を攻
佐久間氏小たぶ佐久間氏追放せ
し後信長信元の罪なき事を
くわしく思ひとまり給きしを信

が為に信長率ひられ給ひ
大樹現ゆたかなる事
同七年三月の賊徒石川新七郎と
安祥の細縄手にあらそ
ふ事
同十二年正月廿一日
大樹現今川氏と盟約を
めたまふ時忠氏まづ兵を天王山
戦ひ一番に勇士と称し軍功とぞ

ます

元亀元年六月江州小谷をせめて
姉川合戦の時軍功あり 隼人正系図
同二年十二月廿二日を別三方原合
戦の時軍功あり
天正二年志摩大久保七郎右衛門忠世
三河文四郎を別大居にせむる時
比叡険阻小してせめおとしがた
し士卒も又つかれぬ海さ小兵糧可

ゆくゆんとせしを天野沢と云ふ
て討ん小手忠重出世ことに形ぐく高
はひとなつくゆせぎ義くつの
軍をまつふして帰る 隼人正系図
同三年武田勝頼三別吉田の城をせ
めとす城兵門をとしひくあた
ふ時忠重軍功あり敵兵鉄炮とも
なつて忠重を右られ脇にあつ玉肉
の内よあつくゆ出るなをもみ義

事あるべき兵を仰くたのまに能
をはるく七年を下知と長篠合戦
此時疵をいたむ事さらになき事、
とぞ
年人正家婿ゝ勝頼右田人ゝ
事をはるくして太の膳と太の膳
ゝなす
同七年言天神社塚をかこむ此
忠年いとゝみ翔ゝ志ゝ軍功とはを

ます翌年信長威状をそつくを捨て
言天神をせめゝ立陣ゝる事三年
同十二年四月長久合戦此時忠年
大次賀丈高髪ゝ柳原小平太多
豊後守丹羽勘介皆此同じく先
鋒とをつゝ三好孫七郎秀次長と
対ゝ大ゝ是と度ゝ勝りあるゝ首
級を得ゝ時ゝ味方の軍利とう
しるかんかゝて忠年従兵八人を引ぬ

くも戦して敵を始めぐ加味あれ兵
孔もの長く明おくる一日の万
ろ

大将現大小敵と成婚事面会兵城
おさめて小幡より入く小牧山より西らん
ゆくたまふ忠毛が中さく今秀吉
能衆ちかあり中多中勢を捕忠勝
士卒いまく戦うます勇氣粉さん
なわ家より入くこと不そうこと敵か

なすす敗をして世一戦ゆく天下は
勝利をたまりん
大将現陣思意始めまき少是をゆろし
たまいすけなわよ兵を引く小牧より
せたまふ
旧年岩田切豊天賜大蔵がはいろ
とる長治の城をせむるは忠毛
び小幡成とくみたうつく城外と
や始る島津おはく戦切あり城つね

小牧ゴ合
同年六月澱川一益と摂津の渡り
せむ時忠重丹羽勘介と同しく一
方をかこんで軍功あり
同年十月
大権現秀吉と和睦をなす
大権現兵をおさめたまふ時忠重先
鋒別所長治町屋小路に秀吉と大軍
を引を渡く対陣をなす秀吉も又長
治小人事を待ぞこ忠重ゆあつく
秀吉なりつふ秀吉忠重を長治対陣
九事を感じ又九年
大権現よりこの数度九軍功をあ
りて事と賞して石川出雲守数正
初八伯耆と同しく武者奉行を命ぜ
同十五年七月晦日忠の姓となり
従五位下に叙し和泉守に任ぜ
同年筑紫陣同十八年小田原陣九

時秀吉より度々發向を
受長三年秀吉叛石田治部
少輔三成与もに法華宗をもんて
大檜現ゝ〻むんかを
大檜現伏見あしますに時忠宗つゝ称ル
為ゝ同作を
大檜現の作る忠宗急難に時よりあゝて
来ゝ也護せずゝとル事ゝ感じ
たまふ

大檜現所あゝ〻大坂ル御陣ル時あゝう
き事あんかす忠宗御前をとる
也ず其切ますゝおゝ
同ゝ年石田三成謀叛に時忠宗弁度
ルあり
同年七月十九日三刀池鯉鮒ルゝ不
意に変あゝ石田ゞ党加賀江
孫八郎ルうさんかす忠宗も又孫八
郎を討ゝ〻ゝ〻もに死す時ゝ忠宗

年六十　法名賢忠道号勇心

勝成

小笠原秀政　歳十九　六萬　日向守

天正九年　勝成十六歳ゆゑ諸ねこおる
しく言ふ天神の城とせめ破と今く首
級を得ふ時より信長感状をつく
郎従あまゝ軍功あり
同十年　加藤氏亡兵と甲州よりおして

大隅殿と新府より討陣北中勝成高岳
長篠三宅迄ゝ同しく　信長
古府中にてまゝく陣とゝ加藤
為信三坂とゝく横口より陣とゝ火を
村里よりゝ川勝成鳥居三宅ともに
相せぎたゝふ勝成四歳来と討ゝ
小ゝ敵兵敗ゝて法将首をきる
事おのゝ数百級を彩府献
はばゝ首を敵陣の前

さてたまふ是より後く氏を和とふ
同十二年四月九日長久と合戦の時一
番に首を取て本陣小田くはまと
獻ず
大檜現円藤四郎と言る者ハ小田
く軍中の神と見せく兵をすゝ先
たまふ井伊兵部少輔直政先駆なり
勝成直政に対面をいとく
急ぎ敵陣小田かけ入く是毋衣けゝ
兵士一人をさ為ける日ハ首をきれ
事三級
同年長田の陣天野右馬之丞の本
陣の脇を横むる時勝成父忠重ハ
くく味方とやぶ川く戦功あり
同年六月十七日滝川一益伊勢江入
時勝成滝川三九郎が兵をさえぎり
相せいく結と合せ二ケ所の戦を
ふる

大権現に生勇切と感じたまふよりち
諸云ふ〻つく罷を父の仕く二生諸者
とさ城し地国を乞く極仕を
天正十五年秀吉筑紫より義向せんと
す時勝成仙ざ〻く和国へ赴む
き肥後国より小ごまつく信奥守成
政つつふ
同年肥後国熊城得る合戦城り
さ〻つく逆さあり時播州成政ふ〻
がつく泄て毛とつ熊城門を開く
あく〻たふ〻ふ〻ども不日ふ毛をせり
おふ〻て熊城父子が首をはうは
度勝成ふ〻びよふ小谷又高松下城
平次等おの〻軍功あり又山鹿の城
とせんふ〻けしも城けつく
ふく毛よせめ不とふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
向城ときつく三田村氏より毛を酒も
らむ〻生仙いまぐ〻城ばる〻に国賦者

動ず従僕逆民を引つれ成政の城
ゆき一揆とうかつく熊谷九郎とか
こむ加賀をとりて十みやうゆく
兵を数して出羽をつく帰日下
熊谷九郎を討ん時賊先陣
なる三日村九郎兵衛つきぬ
加毛利輝元兵粮をいれんこと
国賊兵粮の道をふさぐ立花九郎
を始せく時勝加国くちつく

軍切板羅なり賊逆つめ引きて
ぐしく兵粮の通路をふさぐ又中村
九郎をせむる時勝加一番に河をこす
て首二級をとる又竹宮九郎をせめて
軍切あり
同十六年宇土城ゆく小西行長
を攻る
同十七年九月志波天草九郎逆賊記
九郎行長に仕る陣を張く

沼清正と隙し合せ、其日志波の海
を渡り山上陣とはる志波北の兵
道をぬけ賊兵後動を賜ふと
すんぐいくずみやしに加藤勇孔よ
家々を焼うつ沼長ぶ少
主辰助をふくりてたりひと接
す勝家先登こなつく能をあらせ
首級を取り敵兵城中小引入
味方城外北門を破り又首級を得

其日清正海をうつ志波の
城戸口陣を賊北の民沼を補ふ志波北
城北東山上陣を清正引道をうつ山
器を以て蒔蒔有沼毛高小野才蔵
沼瀧助三位等をもてをとうしむ
山器等賊北たり城ぬ北ぬ
うつ清正兵をとどめてもづ
敵数十人をうちやる郎従も又
戦ひをとげす而賊兵ゆる

事あるこゝにて級をすゝ又行長と
清正と志波れ城をとうとくつゝよ
をとゝゝす十月朔日本丸城をか
えゝゝ廿三日さゝまをせめおとすに付
勝成先がけして首一級をとるすん
でに城れトにいる敵十人突出
勝成が郎従敵六人をうちさゝるをす
ゝく勝成程仕のあひゝゝ会義あるゝゝ
ゝに勇力をあらハすゝゝふ事を

文長三年秀吉薨して後石田三成等
法堂をむすんて
大稽現をうちすんとす
大稽現伏見れ向鴻ゝ渉れ時勝成は
事をゆゝく能ゝのゝゝゝ命をいゝ
さんとてひをうち伏見をおもむく
毎日来てゝく向鴻ゝいるこゝゝゝ
大稽現を捕しをまるを得すこれ
ゝを先勝成郎ゝゝく父忠をゝ勝氣

と申ハ母方忠重勝隆と中を結く誓
て黄泉ニ及ぶすんハわまゝ申事
なりんこいふ又
大権現一言上しけるハ　君と勝隆
よまみえ給りく我らすいこを
たまいりんこ申後数年を経り
しけるなんく
大権現勝隆ハ伏見ハ向浦ニ行く　君の
御ゝ死ん申事を感じ給

こゝ心忠重一言をおかしめす
ふり形儀したまふ勝隆ハ
思量れ用ゆき事をたゝしめ
して山岳ハ孫をいく忠重ニ命
ゝく仰けるハ父ハ子ハ言を責
施すすやく和睦すし忠重
貴家のうむきに従くすれ
ゝ勝隆を
其後勝隆

大槍現を拔すゝ事と得ゝ
大槍現に忠志あれすゝと感じたま
うけ
大槍現城あゝく大坂ゝゆき給時
危殆の事あり忠重勝成御前ま
伺作て志ぶゝ見も御明ゝ城
もゝ忠志いよゝあゝ
同五年
大槍現舍津小東征せんゝて兵を數

一給時勝成仕奉ス七月父忠重
害せゝ勝成
大槍現此命に依ゝ父が跡をつゝ
刑部の塚自ゝなる
同年八月東國に兵波奉せめゝ
鴻津が陣を樂田ゝ拔て松下石見
守がまゝ而此首級を取城をせん
ゝす井伊兵部少輔亟政本多中務
大輔忠勝等勝成ゝ見を海ゝ

むしゃ時浦津に鉄炮足軽のたくさん
あり九月十四日勝成赤坂すて
大橋現る場をもり御旗をにわん
事と言上す
大橋現勝成より命じて仕けるに首級
軍用運送通路なわ世間に
ふきとなりて十五日関原合戦勝
成ようびよ市正暁方より桑田を
姫の町口に入敵兵姫せぎたくかゝ

勝成強くゝ敵をうつこゝろ一郎左
岩田弥源太に其首をもゝしむ又大垣
城に二の丸と成姫谷時郎左おゝ首
級を持く火を町口にうつるつく兵
を林寺に回りおさめくゝれいら使
を関原に軍中について勝ゝ
我言上しけるば
大橋現感悦しゝ使者を出し
賞令をたゝ十六日に東大垣城に

あつ〻相良左馬助秋月長門守馬
ゐ近三人書をとらせて勝久びゝ桜
毋波守をつげくいたゝ三人を
たすけくゝ頼安堵れ書をとらばゝ
福原右馬助をゝびゝ進ぜ円義元木村
迫馬父子垣見和泉守首を切くく
ざらんあれ是とゆるす暫又給しけ
るは伴れ首とゝ〻ハ旗をあげ
旗と見ハおの〻城中に入べしとゝふ

十八日御れ円ゝり相良兵部ゝり木村
父子迫ぜ垣見ゝ首とめくしめくも
して旗を物ゝ時ゝ勝成能木与八郎
ゝ旗ニかゝりくせく城ゝ入毋波ゝ十五
日ゝ合戦ゝとくまゝ書といつく法
将とあぎむ〻〻城をゝんこと福
原ゝ物せぎ弾く苦ゝ敗ゝす勝成
使を城中につゝいてかゝ聲ゝ子
とおさゝ出ゝと安法せむべしと

以福原命に應じて加賀守をとゝ
まゝ塚をあげゝ
日十五年五月十一日從五位下に叙し
日向守に任ず

同十九年大坂陣の時

大檀那御旗を信玄ふたゝび勝成
給命に依て大和北条ならびに流丹後
当毋明動分当を引ゆゝ信玄れる
る陣をとる十二月蜂須賀阿波守稼角ゲ

瀬をせめ給ふ時勝成と永井右近
ゝ之に従ゝ是命をとゝけ
たまゝ葦潟ゝ新蔵ゝ
こゝ百の足をぢを足おいつゝ人信玄
る陣ゝこす勝成いゝく我と丹後
こゝ東宮にゝまつゝく阿波をおそ
い私へ右近がいゝく使命をとゝけ
て家ゝ来る由使又同しく命
とゝへゝて可ゝ

為加勝成ゟ使者を
以て之を被申渡候ハ、
おそれ奉存候旨申上
之天満北新場
て城中に引入
大橋現天満橋の事とこゝ
敵兵相防く鐵炮を
見る事あること
大橋現勝成より命して見せんと

之勝成命を以て申渡候ハ、西国の
兵天満にあり而其末を以て楯柵を
設く城とせむ石川主殿ハ新場町
小入西国の兵を河内堺に陣を張て天
満橋おつるを三ヶ二なりとく其後
大坂和睦となりおのく西陣
元和元年大坂再乱北時
大橋現ハ二条北御城よりく
名酒院殿ハ伏見北城より淀辺の時酒井

和泉守大井大炊助成瀬隼人正安宅
常刀右衛三郎命をうけたまはり
勝成をめしてつかはくいたく松倉豊後
守城冊後守同三郎丹羽式部祐保
長三郎別所孫次郎奈山伊賀守
同右馬佐同右衛門尉大近
右衛門尉曽我蔵人佐村瀬
三十郎甲斐宗右衛門尉勝成さとく
くをとり引のくお陣すべし二十晩又

氣をつかはくいたく大和口を守るく先陣
藤堂和泉守井伊掃部頭と勝成合
せくこと朝をたゝかふなを海内をうん
じて兵乱よ相治事をうれし軍
はをうむく者あるハまみやうゝ兵を
誅すゝ勝成すゝうゝ兵をうるく
長沈ゝくゝ大坂れ兵部山を焼ゝ
をやくくいうゝ紀伊国部ゝいうゝ松倉十九
藩奥田三郎右衛門と同しく伯耆をうく

海をへだて敵兵を面前に入すあるべ
ず
八月廿日
石清水院敵より黄金五十枚をたまふ八月
十九日摂津大坂あいてより多勢濃州
松平下総守陣と南の山下に陣ス
勝成中山勘解由村瀬左助と同く
陣取ル夜ハ敵ハ和と見る美濃
使をもつて申こしひきハ勝成ハ山下陣
をとれ取し我も国府小陣をとらん
人皆可なりとす勝成いとく山下
地形をもしらずして敵兵ハ
右入をうけひ国府の山ハ陣
をうんをハ志うしい敵松明数千挑
井寺にをく志ぐくの相ゆくき
ゆるを見て勝成敵兵挑井るいあり
こさゆつく組中ハ兵ハ下ゐして
海ををく是を待敵ハ坂挑又兵
取井るハ参四の宮ををく大和

踏まかりむき柿曉より戸山みのぼつ
て鐵炮をとる利松倉奥田笠お義て
奥田笠数十人義死を播磨もうう
なんとく西れ兵をひきゆく義を搦とり
時勝成が長子美濃播を手びき中
山勘解由村瀬助兵馬もちたる
一ツ井乙橋をつく地をとる敵を
く敵兵物せきたるすあこぶて
ちげちる播州士卒あまた首を切

く目録をとるを是を次奈に献ぞ
西郷不法國ちく使者をもて黄金を
たまふ十日敵物数井寺に紀小あり
播州兵ごたうんとす政家いとく
勝成をはまことたうば我うんぜ成
む事をとんや松しも兵ちる我兵共
四と義おはく庶をかゆ物又
中命に為ふすゆうくたて
ふ事をを播州中氣のあると

く義すを以て日もくれに夕場に
及く敵兵陣屋を放火して城中
小引入七日ハ敵兵を負して大坂ハ
城ゟむふ

大橋現出雲膳つ多橋つ多橋つ膳
成て命じて伯耆ハ膳所ハ合戦
ハ疲労いまだやむべしず士卒も又
おなく疲と時ゟ日かゟす御
旗ゟ候すべし伯耆小ゟく清

ゟ上意をうけたまわり
ゟくに安部野にいたるく越前ハ
茶臼山をせむるハあふて伯耆ハ
すて越前ハ兵ことに志田ハ兵を
進うつ英雄当膳を兵をゟ城の
黒門ゟ入百余ハ頸をとる膳ハ敵場
ゟ城ゟいんとす敵ハ城ハ
掃部志ゟに鐵炮をなつくさう
ゟせに義ひを決て勝成馬ゟおを

亡年とゝ知て勝成が家臣広廣四郎書
敵ゝゝゝと見て勝成づゝゝと
敵を切く畢又壽よこと首とゝし
む所久しく戰く又敵二人と付
ゝゝ者こと外而除此首級と給ゝ
敵無はゝゝ敗走て播磨つゝよ
播門ゝゝ一番の旗をたつ
同年弁慶とあゝため和州郡山
ゝゝ六百石と領ゝて

同八年八月四日郡山とあゝため御
加增とゝまゝつく備後国福山て
十万石と領しあゝたゝ城郭とゝゝ
ゝ西国此結清こなる
寛永三年從四位下に叙て
同九年肥後此国を渉改易此時
勝成

将軍家此命とゝけく肥州よゝむ
き法ゝこ同しく城郭とゝ後て

同十五年肥前國鍋島藩の和流
蜂起を法將
幕軍鎮撫の命をうけて義兵を募
勝成も又 佐賀藩 援兵
を引ゐて鳥羽に赴き戦功を
たいげん

市正
孫十郎
忠清

隼人正
大指現の命をうけたまはりて関東合
戦の御旗を下し給ふ
慶長七年従五位下に叙す其
好 佐賀
右法院殿了一人 忠清女一歳
財政書院に出張となり又出養
若狭を つとむ

大坂陣中に徒士をつとめて戦
功あり
元和二年四月二日頃病死
大橋現忠清とめしてと堺に國とゆ
ゑ殉死いとも忠清是を辞
すくあつてくのがず土井大炊頭
が手上野介が家下に何作を拵
蔵変状元個馬もも又ゑれて
りにありまりにおゆく

大橋現に仕る忠清先祖世々忠功
あるを又父忠勇四功を何しを
みるず忠清を度大坂にて第年
なりとい水もつとめ軍功をとげ
ます二を忠志諫ゑり感じおぼす
そにも家頂三別弁度に味を
たまふのり思言をるはぐ多
忠清命のかこじけるこ事を
辞して退去て

寛永九年八月十一日

将軍家より給ふ仰くめされくはうよ

おもむき舟屋をあらためて三列

古田の城をこなるべ

同十一年

将軍家渉入海還御の時来光を加へ

たまふ

同十九年七月廿八日古田をあた

めく仰付れ加ふ扶ち二百五

十石

子孫

大膳亮忠を養子仰付て加藤

肥後守清正の嫡男忠広卒て

跡清浄院と号す

作渡守

志磯

お羽ち

寛永十一年十二月従四位下に叙す

長女

寛永十八年

竹千代君ゟつゝしを受る

男子二人

女子

京極備前守高盛妻

女子

山口駿河守重

女子二人

勝重

義直卿

従四位下

寛長十三年ゟ

右近衛殿ゟつゝしを受る

同十四年従四位下に叙す

元和元年大坂陣の時軍事をなす

此事八勝成が譜中に詳なり

寛永九年肥後国没収の時勝重
将軍家より命をうけ弾正大弼を
つゝ肥後小おもむき城郭を検分を
同十五年肥前国鍋原の公利文冊
の後嫡子時勝重 仰命をうけ父勝
成と共に検地をおこなひ数向
一揆をすゝめ徒党賊徒皆
たいらぐ
同十六年勝成老年におよぶ故
隠居を願す勝重 仰を蒙り如此
こと督をはぐ
同十九年従四位下に叙せ
られ

成貞

出雲守
元和五年六月免許蒙る
将軍家へ一つ人数
寛永元年八月従五位下に叙せ
同年十二月采地千石をたまふ

同二年九月二子ゝ分ケ三千石を領ず

勝信

同記

実ハ市正が子なり勝成是を養ふ

勝則

織部正

勝忠

右系譜

生国三河

寛永三年ちゝめく

将軍家を拝したてまつる

同六年中奥の法番仰つけむ

同七年俸二万俵をたまふ

同八年法眼となむ

同年従五位下叙せ

同十一年上総の国ゝく二千石の地成

たまふ

勝貞

備前守

寛永十五年肥前國鴻原ノ郡鉢

増紀ノ時父勝重に召つく数向を

同十六年はるゝく

将軍家と謁したてまつる

同十七年従五位下に叙せ

家紋丸内二本澤瀉永楽銭

墨物志若家傳ていく先祖軍

功あるとゝく永内ノ時永楽銭を

授ら加永楽とゝく家紋ことを

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan